

長崎と天草地方における近世の「疱瘡墓」

The Smallpox Graves in Nagasaki and Amakusa Regions during
the Early Modern Period

賈 文夢

Jia Wenmeng

長崎と天草地方における近世の「疱瘡墓」

賈 文夢

The Smallpox Graves in Nagasaki and Amakusa Regions during the Early Modern Period

Jia Wenmeng

要 旨

During the Edo period, there were special measures against smallpox epidemic in the Omura, Goto, and Amakusa regions. It was a policy of thorough isolation. Those infected with smallpox were isolated in the mountains, on the coast, and on remote islands, and were buried in isolation even after death. That grave is a “*Hoso baka* (it means smallpox grave).” The author conducted on-site surveys of about 20 smallpox graves scattered throughout these regions, analyzed the tombstones and ceramics left in the cemeteries, and made inter-regional comparisons. The author also clarified the regional characteristics and diversity of smallpox graves, and considered their meaning. The author also clarified the relationship between the isolation areas of smallpox patients and the migration of hidden Christians from Sotome area to Goto region, and the status of smallpox infection in areas where thorough isolation policies were implemented.

キーワード：smallpox, grave, grave yard, early modern period, epidemic

1 はじめに

人間と病気になるウイルスの戦いは太古の時代から続いている。今も世界中でさまざまな感染症が流行している。特に2019年冬から世界中で流行している新型コロナウイルスの感染流行は2023年現在も完全には終息してはいない。新型コロナウイルスに対してさまざまな対策がとられたように、これまでも多くの感染症に対してさまざまな対策がとられてきた。

天然痘も種痘が普及して感染が抑制されたことにより根絶に至るまで、その感染力の強さと致死率の高さにより非常に恐れられた感染症であった。江戸時代の都市部では毎年の

ように流行する常在病として存在し、小児に多くの犠牲が出る病気であった（酒井 2002：155）。都市部を離れた地域では状況が異なっていたが、それでも数年に一度はどこかで大流行していた。一方、天然痘が流行しないとされていた土地もあった（香西 2019：79）。九州の大村、五島、天草地方もそうした流行しないとされた土地であった。

天然痘が流行しないと言いつつ、天然痘患者が存在しないわけではなかった。その証拠に大村、五島、天草には天然痘に関わる多くの石造物が残っている。本研究の主テーマである疱瘡墓もその一つである。つまり、天然痘患者が存在しなかったのではなく、徹底した隔離政策によって、天然痘ウイルスのない空間を作り上げようとしていたのである。こうした政策は疫病への対策の一つであり、現代でも行われている。

そして、疱瘡墓は、そうした隔離政策によって生み出された墓である。人里離れた土地に隔離され、亡くなると死後も隔離されたまま、その近くに葬られた。そのため、疱瘡墓に関する研究はとても少なく、その多くが正確な位置すらわかっていない。人里離れた隔離地である上、その後も忌避された存在であったからである。しかし、これらの石造物は、人間とウイルスとの戦いを示す物質資料であり、隔離が生み出した差別を物語るものでもある。

そこで、本論では、疱瘡墓などの疱瘡関連石造物を通じて、大村、五島、天草のように天然痘が流行しないとされていた土地の疱瘡流行実態について明らかにする。疱瘡墓は山奥や海岸、離島など人里離れた場所に存在する。地域に埋もれた存在である疱瘡墓に焦点を当て、どのような感染状況が起こったのか、地域による違いがあるのか、また、その空間のあり方も考えたい。

なお、天然痘は、日本で歴史的に「疱瘡」と呼ばれている。それ以外は「痘瘡」、「豌豆瘡」、「裳瘡」などとよばれ（香西 2019：67）、古文書などでは「痘」とのみ記されていることもある。本論では江戸時代の天然痘について主に疱瘡という言葉を用いる。そして、本論で用いている大村、五島、天草地方などの地方名はそれぞれ大村藩領、五島藩領（富江領を含む）、天草天領を指している。また、香西は天然痘が流行しないとされていた土地を「無痘地」と名付けている。無痘地は歴史的用語ではないが、本論でも便宜上、無痘地という名称を使用しようと思う。

2 研究の背景

2.1 天然痘について

天然痘¹は、おそらくアフリカに起源し、旧大陸に広がり、さらに世界中に広がった伝染病である²。紀元前1157年に死亡したエジプトのラムセス5世のミイラに天然痘による痘痕が認められている（香西 2019：39）。コロンブスの新大陸への航海以降始まったヨーロッパと新大陸の交流とともに、ヨーロッパには新大陸からの梅毒が、新大陸には旧大陸からの天然痘が急速に広がって、天然痘と梅毒は地方の病気からついに地球規模の伝染病となった（相川 2018：18）。ただし、種痘の普及により、天然痘は1980年に世界保健機関（WHO）によって根絶宣言が発表された。現在では研究機関で、ウイルスはサンプルとしてのみ保存されて、自然界で見ることもない（香西 2019：46）。

天然痘の特徴として、まずは人以外の自然宿主がなく、人から人へ感染することだけと見られる。次は、感染した場合、軽重の差はあれ、潜伏期を経て症状は必ず出る。そして、天然痘は一度罹患すると終身続く免疫が得られる特徴も持っている（相川 2018：19）。

2.2 江戸時代の疱瘡の流行形態と「無痘地」

江戸時代には疱瘡は主な小児の流行病となった。都市の人口密度が高く、疱瘡は常在病として、流行した際には多くの子どもが亡くなった。橋本伯寿の『国字断毒論付録』は、「痘瘡流行すれば小児多く死するゆへに故衣舗に痘瘡児の故衣おほし」（池田 1861）という観察を残している（香西 2019：94）。しかし、一度でも罹った経験があれば、一生繰り返されないという特徴がある。そのため、「大人事」として、都会の疱瘡は避けられない通過儀礼的な病とされていた。

日本国内では、疱瘡は地域によって異なる類型で流行し、疱瘡流行の対策にも異色の形態が存在した。熊本藩細川侯の侍医・村井琴山は天明8年（1788）、疱瘡に関連した書物を『痘瘡問答』の一冊にまとめている（大島 2018：27）。その中で、日本における疱瘡の流行の周期に関して、「（前略）我邦ニテハ七年一回、此病大ヒニ流行ス。中華ノ痘書ニ見サル所ナリ。夕、大都市ハ終年処々コレヲ患フトイヘトモ、亦七年一回大ヒニ流行ス。コレ地方ノ異ナル処ナリ。（後略）」（楢林1849）³と述べている（大島 2018：29 問答1）。つまり、日本では大都市の疱瘡が終息しても7年経てば流行し、地方の状況はそれぞれであるという（大島 2018：29）。

一方、香西豊子の研究によると、疱瘡を遠ざけてまったく流行しない土地も存在した（香西 2019：79）。前にも述べたように香西はこのように疱瘡を遠ざけて、一生疱瘡を患わないとされた土地のことを「無痘地」と称している（香西 2019：79）。

例えば、『痘瘡問答』の問答16には、「(前略) 然リトイヘトモ、我カ肥天草一郡ノ人ノ如キ、コレヲ避クレハ一生コレヲ患ヘス。肥前ノ五嶋・平戸・大村、紀州ノ熊野ノ如キモ亦同シ。(後略)」とあり（楢林1849）、橋本伯寿の『断毒論』には「本邦、豆の八丈島、信の御嶽・秋山、飛の白河、北越の妻有、紀の熊野、防の岩国、予の露峯、土の別枝、肥の大村・天草・五島、奥の蝦夷、古より今に至るまで、皆能く痘の伝染を避く」（橋本 1811）という記録がある（香西 2019：113）。

しかし、疱瘡を遠ざけているだけで疱瘡患者が存在しないわけではない。『和漢三才図会』の「十卷 人倫之用」には「(前略) 島嶼・山野、痘ヲ知ラザルノ地亦タ之有リ。若シ人他邦ニ出テ伝染家ニ帰ル者有レバ、則チ山ヲ隔テ之ヲ棄テ、自ヅカラ癒テ還リ来ルヲ待ツ。蓋シ其ノ伝染ヲ恐レテナリ」⁴と記されている。つまり、島嶼部や山間部では、終生疱瘡に罹らずに済むこともあったが、そうした地においては、万一、他郷から戻った者が疱瘡をわずらっていた場合、伝染を恐れて、山向こうに患者を遺棄し、治癒後に帰還するのを待ったという（香西 2019：68）。

そして、『痘瘡問答』や『断毒論』で見たとおり、大村、五島、天草などの地方はこの「無痘地」であった。『大村医史』によると、やはり大村藩でも疱瘡にかかった者は近郷の山小屋に隔離している。これは年齢を問わず行い、食糧を与えて養生させている（大村市医師会編集委員会 1994：49）。

一方、大村藩医長与俊達の自伝には、「定めたる看病人の外は、一切交通を断ち、親子夫婦たりとも、立寄ことを得ず、治療のことは申すに及ばず、万事の介抱行届かず、十の七八は斃れ死し、全快して家に帰るは稀なり」とあり（日本医史学会 1958：72）、実際に疱瘡に感染した者の多くは生きて帰ることもできず、棄民に近い状態になっていたようである。そして、大村藩では隔離各所で死亡した患者は家伝来の墓所に埋葬することを禁じていた（大村市医師会編集委員会 1994：49）。例えば、長与俊達が設立した古田山疱瘡所の隔離地の裏手には疱瘡で亡くなった人々の墓が設けられた。これがいわゆる疱瘡墓である。つまり、疱瘡墓とは単なる疱瘡で亡くなった人の墓ではない。疱瘡に罹患して隔離された後、そのまま一般の墓地に葬られずに設けられた墓である。

3 先行研究

3.1 文献史学の先行研究

疱瘡について橋本伯寿は神仏によるものではない、接触伝染病であると明言しているし、疱瘡がなかった地方では徹底して疱瘡を避ける手段を講じている（酒井 2002：158）。香西豊子は日本列島における種痘実践の歴史を広範に掘り起こし、疱瘡が全く流行しない各地の事例から、無痘地の習俗として「遠慮」「送捨て」「逃散」の3類型を提示している（香西 2019：119）。

「遠慮」とは、いまだ疱瘡を済ませていない土地の領主やその後継者に、疱瘡の罹患者およびその親族が近接するのを禁止・制限する習俗である。「送捨て」とは、疱瘡患者を遠隔地の仮小屋に収容して隔離する対策である。「逃散」とは未罹患者の方が患者の発生した場所から逃げる習俗である。つまり、「送捨て」の対策から逃げ、疱瘡流行地から離れる行為であった。

3.1.1 遠慮

まず「遠慮」の習俗は岩国藩で見られる（香西 2019：119）。磯田道史によれば、岩国藩は疱瘡が流行すると、武士・領民に「遠慮」、登城や外出を禁じ、城下から遠く離れた特定の村を「疱瘡退村」として、隔離地域に指定し、そこに隔離されるという（磯田 2020：86）。

3.1.2 送捨て

「送捨て」とは、疱瘡患者を遠隔地の仮小屋に収容して隔離する対策である。「送捨て」については多くの研究成果がある。「送捨て」の習俗は五島、大村、天草などの地方で観察されている（香西 2019：123）。

五島地方の疱瘡政策については、ルイス・フロイス（1532-1597）の著作『日本史』に記述がみられる。すなわち、フロイスは永禄9年（1566）ごろとされる地誌情報として「日本では天然痘が珍しくないが、五島の人々はこの病を（ちょうどわれわれがペストを毛嫌いするように）忌み嫌う。そのため妻子や夫・家族が罹患すれば、家を出して連絡を断つ。どういうことかという、人里離れた林の中に藁小屋を建てて、病人が死ぬか完治するまでそこで治療し、食べ物を運ぶのである。完治した後も、殿と接したり殿に仕官し

たりする人間であれば、一定の月数が経つまで屋敷に入ることは許されない。」と述べている（フロイス 2000：199-200）。16世紀後半には、五島地方で、香西があげた「遠慮」と「送捨て」が行われていたことがわかる。また、橋村修は当初は疱瘡の流行に当たって里人は山に隠れたが、人口が増加すると祝言島や串島しゅうげん くしのような無人島に移すことも行われたと述べている（橋村 2021）。

次に大村地方の疱瘡対策に関する文献史料と研究成果について述べる。まず元禄元年（1688）、大村藩に疱瘡蔓延に対し、藩民にどのような措置をとっているか報告の指示がきている。これに対して、4代藩主・純長は「大村ニ而致疱瘡患者候者ハ山揚ゲ仕候由承度如何様成儀ニ哉、森正右衛門相答え候ハ大村領内之儀ハ先年より疱瘡無之在所ニ而御座候付而城下侍共を始諸村下々百姓ニ至迄男女幼少之者ハ不及申七ハ拾程ニ相成者迄他国江不参候得ハ疱瘡致しは付不申自然疱瘡煩付候者ハ其俣其在所居成り為致候得者大勢疱瘡仕付申候幼少之者ハ軽く仕候得共年老之者共十人ニ七、八人相果申候如斯之在所ニ而候自然疱瘡相煩候者ハ其在所人はなれ之所ニ小屋を懸け置飯米等迄取らせ兼々疱瘡を申付為致養生候」と報告している（大村市医師会編集委員会 1994：49）。大村藩では疱瘡にかかった者は近郷の「山小屋」に隔離し、これを「山揚げ」と称している。

また、大村藩政日記の『九葉実録』の中の元禄元年（1688）の項に、「十一月十日波佐見村痘大ニ行ハル 郷里ヲ限テ家ニ在テ療セシム[旧制痘ヲ病メハ山中ニ移シ医及ヒ食ヲ給ス]」という記録がある。元禄元年（1688）に波佐見村で疱瘡が流行し、「自宅療養」させていたことがわかる一方、その但し書きにあるように、制度的には山揚げ、すなわち送捨てが行われていたことがわかる（大村史談会編 1995）。

それから、『江漢西遊日記』（1986）には、司馬江漢が天明8年（1788）に江戸から長崎まで旅をした際に大村地方の習俗も記録しており、それによると長崎で疱瘡が流行しているとの状況に接すると、隣接する大村では家々が注連縄を張り、戸口で香をたくといった対応がとられたという（香西 2019：107）。

『大村藩の医学』には、当時の大村藩の疱瘡患者に対する苛烈な隔離政策と悲惨さが記されている。すなわち、「舊大村領内は古來疱瘡を恐るること甚しく疱瘡は鬼神の依托なりとて疱瘡にかかりたる者は人家を離れたる山中に木屋を構へて此處に昇送し定めたる看病人の外は一切交通を絶ち親子夫婦たりとも立寄ことを得ず治療の事は申すに及ばず萬事の介抱行届かず十の七八は斃れ死し全快して家に歸るは稀なり而して其の遺骸を先塋の墓地に葬りて常式の葬祭を営むを得ず、幸に全快したりとも多くは畸形盲目となり別人の如

く成果ることなれば疱瘡の厄濟ざる内は縁談の取組等も見合せ置く姿にて一人前の人間とは認めざる有様なり。」と書かれている（大村藩之醫學出版會 1930）。

過去帳の記載に基づいた研究もある。『多良見町郷土誌』には、円満寺の過去帳にある文政2年（1819）から同13年（1830）までの記録内容の中で戒名の左側に「疱瘡ニ而死去」「はら」「此者茂木ニ而死去致」といった死因・死亡場所の記載がある（多良見町教育委員会編1995）。また、天保5年（1834）の疱瘡患者について「右疱瘡似容に付山墓所に取り置き書物出す」と書き留めている。疱瘡と症状が似ているので、「山墓所」に取り置いたという記事である。

天草地方の疱瘡対策については、『上田家文書』の中の『上田宜珍日記』を元にした東昇による研究がある（東 2009・2021）。『上田家文書』は幕府領天草郡高浜村庄屋の文書であり、約7000点の文書群である。村行政に関する庄屋文書を中心に天草の当時状況が再現できる文献資料である。この資料を通して、東は文化4年（1807）から5年（1808）にかけて高浜村が疱瘡流行した頃の疱瘡対策を詳細に明らかにした。また、中山圭も『上田宜珍日記』に基づいて、当時の疱瘡対策の内容について検討している（中山 2022）。

3.1.3 逃散

「逃散」とは未罹患者の方が患者の発生した場所から逃げる習俗である。つまり、「送捨て」の対策から逃げ、疱瘡流行地から離れる行為であった。「逃散」の習俗は大村や天草、蝦夷で観察されたという（香西 2019：119）。

その他、同じく疱瘡流行地から離れる行為ではあるが、他国で治療養生させる「他国養生」という習俗もみられた。「他国養生」については改めて後述する。

以上、文献史学の先行研究は、疱瘡を遠ざける方策に関するものが主であり、その分類も行われているが、それは生きている患者に関するものが主であり、疱瘡によって亡くなった人々やその墓に関するものはほとんどない。死後については、前に述べたように「遺骸を先塋の墓地に葬りて常式の葬祭を営むを得ず」とあるぐらいであり、疱瘡墓については送捨て（山小屋）の記載内容から隔離小屋（山小屋）の近くにあったと推定されるのみである。また、五島、大村、天草地方については、いくつかの優れた個別の研究事例があるが、地域間の比較や全体の研究には繋がっていない。

3.2 民俗学の先行研究

民俗学の研究成果は事例研究が多い。墓碑や墓地も含めて対象としており、葬送や埋葬に関する研究もみられる。例えば、宮本常一の研究によると、頭ヶ島^{からがしま}が疱瘡患者の島であり、疱瘡で死んだ人は、例外なく、全員島の海岸に埋められたことを述べている（宮本 2015）。

天草の高浜には数ヶ所の疱瘡藪跡あるいは疱瘡墓が存在するが、正確な場所が不明なものが多い。そうした中、松本教夫は、高浜貢山の疱瘡小屋の踏査と測量調査を行っている。そして、疱瘡小屋の測量も行なった。松本は、「小屋の近くに疱瘡墓群が存在する。2メートル程の長方形に積まれたもの、丸くケルン式に積まれたもの、中には墓碑に見立てたのであろうか碑名もない手ごろな板石を建てたものもあった」と記録している（松本 1981）。

山下貞文は、南島原の「天草墓」について報告している。島原半島の旧加津佐村・旧口之津村・旧南有馬村で、140基以上の天草墓を確認している（山下 2022）。「他国養生」政策で生み出された墓と考えられている。

その他、市町村などの郷土史編纂の際に疱瘡墓についての情報が集められている。文献史学と民俗学の成果を合わせながら記述しているものが多い。疱瘡墓について触れたものもあるが、断片的な記述や言い伝えが多い。

3.3 考古学の先行研究

考古学的なアプローチは主に物質資料である疱瘡墓についてのものが多いが、その発掘例は少ない。以下の2例のみである。その他、墓地以外の物質資料の考古学的調査はほとんどみられない。

1995年に有川町教育委員会と長崎県教育庁文化課が頭ヶ島遺跡の発掘調査を行ない、疱瘡墓の可能性のある近世墓を調査している（長崎県有川町教育委員会 1996：6）。

また、1999年に大村市教育委員会が黒岩墓地の発掘調査を行なった。この疱瘡墓は菖蒲谷疱瘡所に山揚げされて死亡した者たちの埋葬地と判断され、発掘調査では疱瘡墓の形態と埋葬状態が明らかになっていた（大村市史編さん委員会 2015：312）。人骨のほか、棺桶代わりに使った長持ち、碗や瓶、紅皿、六文銭などが発見されている。しかし、諸事情により報告書は刊行されてない。

考古学の先行研究は上記の発掘例以外にはほとんどない。そのため、疱瘡墓については

不明瞭な部分が多い。そのため、まず現存する疱瘡墓の立地や環境、利用された主な年代と疱瘡墓の型式について基礎的情報を整理し、まとめる必要がある。

4 研究の目的と方法

4.1 研究目的

前に述べたように天然痘が頻繁に流行した江戸時代には、「無痘地」と呼ばれた特殊な地域が存在した。『和漢三才図会』では、「無痘地」は島嶼部や山間部に見られるよう説かれたが、村井琴山の間答では、土地の地理的条件ではなく、むしろ疱瘡を忌避する習俗の帰趨であると説明する（香西 2019：80）。つまり、「無痘地」は人工的に設けられた土地である。先行研究で見たように、文献資料は疱瘡病死者に関するものが少なく、民俗学、郷土史学では比較的病死者について扱っているが、まだ断片的な内容が多い。一方、考古学が対象とする物質資料も多くはないが、大村、五島、天草で疱瘡墓などの多くの疱瘡関連石造物など対象とする物質資料がないわけではない。

そのため、本研究は、疱瘡墓などの石造物を通じて、大村、五島、天草といういわゆる「無痘地」の疱瘡流行の実態について明らかにすることを目的としている。

4.2 調査・研究方法

調査・研究方法は、まず文献史学、民俗学、郷土史学の成果をもとに、疱瘡患者を隔離させる土地の位置を推定し、その後、現地踏査を行い、疱瘡墓の位置や範囲を確定させていくものである。土地利用がわかる古地籍図と現在の衛星写真を比較して、位置を推定する方法も採った（野上・賈 2022）。そして、発見した墓地の中の墓碑の銘、形、立地、分布範囲、数などを調査し、基礎資料を集めて、データベースを作成する。

それから、疱瘡墓や地域の比較研究を行い、物質資料と文献史料や民俗学の他分野の研究成果を合わせて、地域的な特徴を検討して、その意味を考える。最後にこれらのデータから「無痘地」の実態を明らかにしたいと考える。

5 大村・五島・天草地方の疱瘡墓

大村（旧大村藩領）、五島（富江領を含む旧五島藩領、一部平戸領を含む）、天草（旧天

草天領) 地方では、約20ヶ所の疱瘡墓が確認されている(図1)。以下、地域毎に紹介する。判読した墓石銘については、一部を除いて表2～4にまとめている。

5.1 旧大村藩領の疱瘡墓

旧大村藩領内では14ヶ所の疱瘡墓が確認されている。波佐見町で5ヶ所、大村市で6ヶ所、時津町、西海市と長崎市で1ヶ所ずつ調査した。

5.1.1 波佐見町の疱瘡墓

波佐見町は長崎県内唯一海に面していない町である。集落は谷沿いに分布して、江戸時代以来、全国に磁器を供給し続けている陶磁器の生産地である。

波佐見町内の調査方法は主に明治23年(1890)の古地籍図や衛星写真を利用し、聞き取り調査をしながら現地探索を行なうものである。これまで中尾郷で2ヶ所(白岳墓地・葉山墓地)、田ノ頭郷、折敷瀬郷でそれぞれ1ヶ所ずつ確認した。その他、原位置は不明であるものの、移築された疱瘡墓の墓石が湯無田郷に残る。

中尾郷の白岳墓地では6基以上の墓石を確認できる。墓石銘を判読すると、元禄2年(1689)が3名、元禄6年(1693)が1名、元禄10年(1697)が1名と元禄11年(1698)が1名、全部で6名が亡くなっている。男性が5名、女性が1名で、全て戒名が彫られていた。俗名を見ると馬場家が3名、松尾家が1名である。1号墓と6号墓は同じ苗字であり、同じ日に亡くなっていた者である。そして、この6基の没年の年代幅は約10年間ある。

同じ郷の葉山墓地は非常に荒れていて、倒れている墓石、埋もれている墓石、半折している墓石、土台のみを残す墓石などがほとんどで、原位置と原形をとどめている墓は少ない。その墓石銘を判読したら、元文2年(1737)が1名、宝暦13年(1763)が4名と文政10年(1827)が1名、全部で6名である。そのうち、男性が3名で、女性は2名で、全て戒名が刻まれていた。俗名を見ると石橋家が2名と山口家が1名である。3号墓と5号墓は同じ日に亡くなっていた者の墓である。また、宝暦13年の45日の間に4名が亡くなっていた。この6基の没年の年代幅は約90年間である。そして、葉山墓地では陶磁器が採集されており、ほとんどが波佐見焼と見られる⁵。

田ノ頭郷の裏ノ谷墓地では4基以上の墓石を確認することができる。墓石を判読すると、宝暦12年(1762)が1名、明和8年(1771)が2名、文化10年(1813)が1名であり、全部で4名の被葬者が確認される。全て戒名が刻まれていた。それ以外、周囲には墓とみら

れる未加工の立石の石積みもいくつかある。

折敷瀬郷の東舞相墓地は地元の聞き取り情報により特定できたものである。墓標形の石造物は3基あり、その中の1基は文字が刻まれてない。そして、周りには自然石を集積した石積墓が存在する。自然石による墓は没年などが刻まれてないため、正確な年代は不明である。

そして、湯無田郷の湯無田町民霊園の近くには原位置不明の疱瘡墓がある。折敷瀬郷の土地開発が原因で移転したものである。移転した墓石は8基、墓石を判読すると、天明5年（1785）が1名、文政9年（1826）が1名、天保7年（1836）が4名、嘉永2年（1849）が1名である。そのうち、2基は他の地名が刻まれている。

5.1.2 大村市の疱瘡墓

大村市は玖島城がある大村藩の城下町である。大村市内で6ヶ所の疱瘡墓が確認されている。大村市の疱瘡墓は城下町から遠く離れた山中に点在している。波佐見の疱瘡墓に比べて、さらに山深い山奥にあり、規模も大きなものである。これは大村と波佐見の人口の差、感染規模の差、玖島城との距離の差によるものと考えられる。

雄ヶ原黒岩墓地は2000年で大村教育委員会により発掘調査が行なわれている。菖蒲谷疱瘡所に山揚げされて死亡した人々の埋葬地と推定される。85基の墓が発掘調査されている。その中の36基の墓石の銘を読み取ることができている。墓石には、没年月日・俗名・戒名・居住地など多くの情報が刻まれている。そのうち、13基は被葬者の俗名と戒名が記されているが、残り23基には戒名がなく俗名のみが刻まれている（大村市史編さん委員会2015：314）。江戸時代は異教防止のため、死亡すると檀那寺から戒名が授けられることが定められており、俗名のみ刻まれた23基は異例である。おそらく、当時、死亡人数が多いため、戒名を授かることなく、早急に山中で埋葬されたと考えられている（大村市史編さん委員会2015：315）。

そして、発掘調査箇所の道路の対面側の藪の中には、円形や長方形の墓穴が藪の中で確認できる。おそらく、当時埋葬する時、長持ちやオケなどを棺桶として利用し、丁寧な埋葬を行っていないため、地面が陥没していると推定されている。17基以上の墓石が発見されており、発掘調査地で発見された墓石と同じく俗名のみのもが存在する。そして、墓石には被葬者の居住地が刻まれたものがある。「池田分」・「今津」・「小ろ口」・「大仁田」・「古町」・「前船津」などの地名を確認できる。地名は広範囲にわたっており、広範囲

の罹患者が埋葬されていることがわかる。久田松和則は、地名を刻むことについて、黒岩墓地で広い範囲の領民に対し山揚げや疱瘡の治療・予防が行われていた様子が窺えるとす（大村市史編さん委員会(編) 2017)。

また、現地には18世紀末から19世紀かけて生産された陶磁器が散布している。墓石の前に供えられた陶磁器が残されたままのものもある。

黒岩墓地から南東に1キロメートル離れた場所に古田山疱瘡所跡⁶がある。疱瘡所の裏のほうそう山に墓地が存在したと伝わっている。付近に6基以上の墓石が寄せられている。地元の人への聞き取り調査をよると、この6基はほうそう山の墓地から運ばれた墓石であり、墓石銘を判読すると、黒岩墓地の墓石と同じく、俗名のみ刻まれた墓石や地名が刻まれた墓石の例が存在する。

玖島城からさらに離れた山奥には4ヶ所の疱瘡墓が確認されている。^{なるかわち}鳴川内墓地、^{よこやま}横山頭墓地、^{がしら}孫十墓地、^{まごじゅう}餅ノ塔墓地などである。鳴川内墓地は国道444号線、萱瀬ダムの手前の脇道から入った山の奥にある。現地は大雨などの原因によって地滑りが発生した地形を呈している。墓石は確認されていないが、白磁の小坏を1点確認した。小坏の生産年代は18世紀末から19世紀前半であり、墓地で使われた祭祀品の可能性が高い。現在、遺物は大村市教育委員会により保存されている。

横山頭墓地は東大村町にある。現地調査の結果、藪の中に文字が刻まれた8基以上の墓石と多数の無字の自然石墓を確認した。墓石銘を読み取ると、俗名のみ墓石は5基、地名が刻まれた墓石が2基ある。地名は「本町三丁目」と「五嶋」である。そして、この墓地で多くの陶磁器が発見された。18世紀後半から19世紀に生産された「くらわんか」が多く見られる。そして、円形や長方形の墓穴も確認された。

孫十墓地は代宮町にある。現地調査の結果、藪の中に文字が刻まれた3基以上の墓石と多数の無字の自然石を立てた墓を確認した。文字が刻まれた3基の墓石銘を読み取ると、いずれも俗名のみが刻まれた墓石である。その中の二つは「かやぜ村」の地名が刻まれている。そして、無字の墓の中に十字が刻まれた墓石を確認した。被葬者はキリシタンであった可能性がある。

餅ノ塔墓地の現地調査の結果、墓石、階段跡と仏塔の一部が発見された。文字が刻まれた墓石は1基だけであるが、無字の自然石を立てた墓は数多く確認できた。文字が刻まれた1基の墓石銘は地名と俗名のみが刻まれていた。孫十墓地と同じく、無字の墓の中に、十字が刻まれた墓石も確認された。そして、現地の地表では数多くの陶磁器も確認できる。

そのうち、いわゆる「くらわんか」とよばれる日用品の碗が多く、少ないが瓶と皿も見られる。

5.1.3 時津町の疱瘡墓

時津町は大村湾に面した町である。1ヶ所の疱瘡墓、元村墓地が確認されている。元村墓地は、1980年に始まった長崎漁港臨港道路の建設工事によって発見されたものである。長崎の原爆の被爆者が埋葬された墓地として知られて、戦前は死んだ馬や牛を埋めた場所であったという（野上ほか 2022）。

元村墓地では、68基の墓石を発見した。疱瘡墓の墓石群は二つのグループに分けられる。一つのグループの墓石群は石垣の一部として利用されており、もう一つのグループの墓石群は平坦部に設置された旧慰霊碑の土台と見られるものの周りに集められている。墓石の大きさと形状にあまり違いは見られない。ほとんど「櫛形」の形を呈する同時代の一般近世墓と同様のものである。

判読した結果、68基全部に戒名が刻まれていた。多くの墓石はそれぞれ1名のみ戒名などが刻まれているが、1基のみ2名の被葬者が供養されている。そのため、墓石に刻まれた戒名数からわかる被葬者数は69名である。そのうち、戒名から性別が判明するものは59名であり、内訳は男性が28名、女性が31名である。そのほか、性別不明の中には女性の戒名などに多く使われる「妙」字を持つ者が3～4名いる。

墓石に刻まれた最も古い没年は宝永3年（1706）11月17日であり、最も新しい没年は天保12年（1841）1月3日である。少なくとも130年以上の間、疱瘡墓の区域であった可能性がある。享保18年（1733）2～4月の間に3名、延享2～3年（1745～1746）に2名、宝暦3～4年（1753～1754）に5名、明和6～7年（1769～1770）に5名、安永3年（1774）から8年（1779）にかけて13名、寛政元年（1789）に2名、寛政5～6年（1793～1794）に2名、文化元年（1804）に2名、文化10年（1813）に3名の方が亡くなっている。特に安永年間には多くの犠牲者が出たことがわかる。

墓地で採集された陶磁器は、肥前系の磁器碗、皿、鉢である。いずれも18～19世紀の製品である。波佐見焼のほか、現地に最も近い長与皿山の製品も含まれていると推定される。

5.1.4 西海市の疱瘡墓

西海市は西彼杵半島の北部に位置している。1ヶ所の疱瘡墓が確認されている。疱瘡病

死者を供養した柴山宝塔の周辺に位置する。

柴山宝塔の土台として利用されている4基の墓石を確認した。それぞれの墓石銘を判読した結果、4基とも戒名が刻まれており、最も古い没年は元文元年（1736）、最も新しい没年は宝暦4年（1754）である。没年の年代幅は約12年間である。一方、宝塔周囲の森の中には、自然石の集積がみられる。これらは石積墓と見られる。

5.1.5 長崎市の疱瘡墓

長崎市内の一部はかつて大村藩に属しており、1ヶ所の疱瘡墓を確認されている。長崎市大浜町に元文2年（1737）に疱瘡で亡くなった福田長兵衛の墓がある。墓の正面に戒名の「妙法能持院宗是日継居士」と没年月日の「元文二丁巳年三月二十八日」と刻まれている。福田家24代福田長兵衛は福田村が被害を受け住民が難儀しているのを憂えて元文元年（1736）田子島より崎山まで石垣を築き防風林を植えたが、翌年福田長兵衛は疱瘡で死亡したので、大浦郷江川内に埋葬したという。現地調査の結果、長兵衛の墓以外に2基の墓がある。墓地はイノシシの被害がひどく、灯籠などは倒されている。

5.2 旧五島藩領の疱瘡墓

五島列島は、長崎県本土の西方に位置する列島であり、北東側から中通島、若松島、奈留島、久賀島、福江島の5つの大きな島が並び、その周辺に小さな島々が分布している。江戸時代は大半が五島藩（富江領を含む）に属していた。福江島、前島、中通島、頭ヶ島で5ヶ所の疱瘡墓を確認した。

5.2.1 福江島の疱瘡墓

福江島は五島列島の中で最も大きな島であり、近世の五島藩（福江藩）の城と城下をもつ島である。福江島では3ヶ所の疱瘡墓の調査を行なった。

一つは南河原^{なんごうら}の疱瘡墓である。『五島編年史』によると「海岸には疱瘡で死んだ人の無縁墓が累々としてあった」（福江市史編集委員会（編）1995）とあるが、現在では海岸にそのような光景を見ることはできない。そして、疱瘡病死者を供養した記念物「三界萬霊塔」の近くで4基以上の疱瘡墓を確認した。4基の墓碑銘を判読すると、「當處疱瘡死亡」の文字が読み取れ、死因が疱瘡であったことを示している。没年は、「天保壬寅三年三月二日」と刻まれているが、天保3年（1832）の干支は壬寅ではなく、壬辰であり、天保年

間の壬寅は天保13年（1842）である。年号が正しいのか、干支が正しいのか不明であるが、没年と建立年の間に年や干支があやふやになるだけの時期差があった可能性を示している（野上・賈・石橋 2022）。そして、もう1基の正面は三つの戒名が刻まれており、信士1名と信女2名である。側面は、「文政七申二月廿三日 祥 二月廿八日 敬 同日」、「白金屋幸助 同 富」と刻まれている。「孝子」とあるので、この墓石は子らが父母らを供養するために建てた墓とみられるが、同日を含めて数日間で3人が亡くなっていることもわかる。一方、墓石には「肥前屋」や「白金屋」などの屋号が刻まれており、被供養者は福江城下の商家の縁者と見られる。

次は福江島の^{うちやみ}内閘である。五島市^{こもりぶち}籠淵町内閘ダムの付近に位置する。『福江市史(上巻)』によれば、福江では、疱瘡流行した時、士族の人は南河原に、士族以外の方は内閘に捨てられていたという（福江市史編集委員会 1995）。そして、当時、行われていた対策方法も書かれている。疱瘡で死んだ人は内閘と水道口の間に墓地があり、そこに葬られたと伝わっているが、現地踏査では確認できていない。そして、疱瘡患者が隔離されていた場所は内閘ダムに水没した可能性がある。

三つ目は福江島の握りの浜墓地である。現地では10基以上の墓石を確認した。それ以外に地蔵、石組墓も点在している。石組墓は丸石などを組み合わせたものであり、柱形の墓石などの基部となっているものもある。また、板石を組み合わせた石祠に仏像を納めたものもある。

墓石銘を判読すると、没年が分かる病死者の墓石の中で最も古いものは、天保13年（1842）である。その墓石は正面に「大婦人平田氏之墓」、側面は戒名「含章院貞香妙清大姉」と墓の建立経緯が刻まれている。内容は以下の通りである。

王母名利恵古平田自仙翁之女（欠損）我王父伯圭府君操行貞淑端正不
惜府君職業繁劇不暇寧居婦人常守家上奉二尊下教兒女兒女畏之
如巖君生五男四女晚患痘瘡令不得養家長子永世君隨療病於此地
医療備至然歲已晚老病甚險不得効遂沒於此地不得歸葬空於握山
之陽干時天保十三壬寅歲七月七日行年五十有六歲

被供養者は「痘瘡」に罹って、「握山」で治療を受けたが、効果なく亡くなり、帰ることができずに埋葬されたことが記されている。この地に疱瘡墓だけでなく、隔離・治療用

の「疱瘡小屋」もあったことがわかる。

また、最も新しい没年は明治3年（1870）である。これまで発見されている疱瘡墓の中では最も新しいものである。大村藩領で発見されている各疱瘡墓で最も新しい没年は大村城下の付近の黒岩墓地で弘化3年（1846）、波佐見の湯無田（仮称）の墓地で嘉永2年（1849）である。久田松和則は、黒岩墓地の没年の刻銘について、長与俊達による牛痘接種が始まる嘉永2年（1849）以降の墓石は全く見当たらないことから、牛痘接種の効果が現れ、死亡者が出なくなったことを示しているとする（久田松 2022）。

一方、握りの浜の没年の刻銘は嘉永2年（1849）より新しい1860年代に集中している。種痘の先進地である大村と五島では、種痘の普及度が異なっていたことを示している可能性がある。

5.2.2 前島の疱瘡墓

前島は、奈留島の南端付近に浮かぶ小島である。江戸時代、前島は泊郷に属しており、現在は五島市奈留町泊に所在する。ここで1ヶ所の疱瘡墓の調査を行った。

前島の江ノ浦には、奈留代官山口家の次男である山口倫十郎のものと思われる墓が残っており、墓石の側面に「疱瘡」で亡くなったことが刻まれている。そして、倫十郎の墓石の周囲に疱瘡墓と思われる墓が点在するという。また、「尼妙道信女位」と刻まれた墓石があり、倫十郎を尼となって弔った妻のものと伝えられている（五島市 2011）。

倫十郎の墓とその周囲の疱瘡墓と伝えられている墓を調査した。墓地は、前島の江ノ浦港の小さな集落がある湾の最も奥まったところの小さな平坦地にある。墓地は海のある北西側を正面にしている。合計12から14基の墓が見られる。基数に幅があるのは一つの墓の石組が二つに崩れて分かれている可能性があるためである。3列で並んだ墓石は、最前列に5基、2列目に5基、最後列に3基、そして、最前列と2列目の間に1基配されている。また、墓は柱形と石組墓に分けられ、その数は柱形の墓が2基、石組墓が10～12基である。

柱形の墓の一つは前に述べたように、奈留代官次男の山口倫十郎の妻の墓とされているが、それを示す証拠があるわけではない。柱形の墓石正面に「尼妙道信女位」、側面に「天保十三寅壬年八月十日」の没年月日と「み洋」の俗名が刻まれているが、それ以上のことはわからない。

もう一つの柱形の正面は摩耗と風化が著しく、文字はほとんど読み取ることができない。正面からみて左側面には「疱瘡而□□死」（疱瘡而此病死カ）と刻まれており、死因が疱

瘡であったことがわかる。そして、正面からみて右側には「施主山口雄太郎」と刻まれていることから、被葬者が山口家ゆかりの人物であることは確かである。しかし、戒名や没年月日について不明である。その他、倫十郎と特定することができる史料の存在もない。

柱形の墓以外、石組墓は平面プランの原形が崩れたものが多いが、長方形の平面プランを有したもや方形の一部の形をとどめたものが見られる。

5.2.3 中通島の疱瘡墓

中通島は五島列島の主要な島の中で最も東に位置し、福江島に次いで2番目に大きな島である。全島は長崎県南松浦郡新上五島町に属する。赤波江集落は南松浦郡新上五島町立串郷に所在する。富江領と旧平戸藩の境界付近の旧平戸藩側に位置するが、後述するように被葬者に富江領の者が含まれているため、ここで扱うことにする。ここで1ヶ所の疱瘡墓の調査を行った。

疱瘡墓は赤波江教会から北東側約200メートルの位置、海岸まで降りた道の脇にある共同墓地にある。十字付き墓碑と石組墓のキリシタン墓、キリスト教信者の墓が多く見られる。そして、その棚田状の墓地の最下段に疱瘡墓がある。

道路脇の石垣の上に1基の疱瘡記念物と15基以上の疱瘡墓を確認した。疱瘡墓はおおよそ前後二列に並び、主に柱形の墓石であり、不定形のもものが1基みられる。柱形の墓碑正面には戒名、側面は没年月日が刻まれているが、風化の為文字は読み取りにくい。

没年がわかる病死者の墓石の中で最も古いものは、天保12年（1841）である。その墓石は正面の文字が読み取れないが、側面には複数の没年月日刻まれており、複数の病死者が供養されている。天保12年（1841）から13年（1842）にかけて7名が亡くなっている。そして、最も新しい没年は文久3年（1863）である。大村藩領で発見されたいずれの疱瘡墓より没年が新しい。この墓地は20年以上存続したことがわかる。

また、不定形の墓石の正面には「似首村（欠損）」が刻まれている。似首集落は、赤波江集落がある新魚目の半島の付け根側にあり、赤波江共同墓地から南へ直線距離で10キロほど離れた場所に位置する。藩政時代は富江領であった。この墓地に埋葬された人々の居住範囲を知る上で重要である。被葬者の居住地が刻まれた例はこれまで五島地方では他に確認されておらず、大村藩領の黒岩墓地で多くみられるものである。

5.2.4 頭ヶ島の疱瘡墓

頭ヶ島は中通島の東にある島である。中通島と頭ヶ島大橋で結ばれている。全島が長崎県南松浦郡新上五島町に属する。2010年の国勢調査によれば、人口17人、面積は約1.88 km²の小島である。頭ヶ島を開拓した主導者前田儀太夫の墓碑には開拓の状況や歴史、人口や戸数などを記録した「頭ヶ島由来記」が刻まれており、碑文の中には「本島嘗テ痘瘡避疫地」とある。現在は、近世の墓石は確認できないが、頭ヶ島教会資料館には明治10年(1877)頃の頭ヶ島の「白浜」字図の写が展示されている。字図の中で墓地が水色に塗られており、明治初期は浜全体が墓地であったことがわかる。

そして、1995年に有川町教育委員会と長崎県教育庁文化課が頭ヶ島白浜遺跡の発掘調査を行なった⁷。頭ヶ島白浜遺跡は有川町北東部に位置する頭ヶ島北部の海岸に立地し、行政上は、南松浦郡有川町友住郷字白浜にある。調査では多くの人骨と副葬品が出土している。

5.3 旧天草天領の疱瘡墓

天草地方は熊本県の南西部に位置し、3ヶ所の疱瘡墓を確認した。

5.3.1 高浜貢山

高浜貢山の疱瘡墓と疱瘡隔離小屋は松本教夫氏により発見された(松本 1981)。そして、疱瘡小屋跡についても測量を行っている。現地調査の結果、松本が発見した疱瘡墓とは異なる別の疱瘡墓を発見した。

疱瘡墓は天草市天草町の高浜港の県道280号線から山の方に直線距離約3kmの山奥にある。疱瘡小屋跡の石垣が2段に分れて見られる。発見した疱瘡墓は石垣のある平坦地の上段にある。未加工の自然石の墓が多く見られる。それらは2種類あり、石囲い状の集石中央に明瞭な立碑がある自然石の墓と50~100cm程度の規模で、不定円形もしくは方形に乱雑に石材を集積した石積墓がある。石積墓には立碑がないが、立碑が倒れた可能性が考えられるものもある。いずれも文字が刻まれていない墓である。

5.3.2 ホウソ谷

亀川町食場字ホウソ谷について、文献などの記録は未確認である。青木賢治氏ら天草レキバナ会による現地踏査で確認された(中山 2022)。字名と立地から当地が疱瘡の隔離小

屋と推定された（中山 2022）。

5.3.3 下馬刀島

下馬刀島は天草本島から東の海上の離れ小島である。周囲 2 km ほどの小さな無人島である。島全体が疱瘡の隔離場所と見られる。地元では疱瘡墓にまつわる唄が伝承している。

6 疱瘡墓の分析と考察

調査を行なった20ヶ所の疱瘡墓について、立地・環境、年代と墓の型式から検討し、その特質を考察したい。その上で、大村、五島、天草といういわゆる「無痘地」の疱瘡感染状況や対策の実態を明らかにする。

6.1 疱瘡墓の立地・環境

疱瘡墓は隔離施設の近くに作られたため、隔絶した場所にある。そのため、疱瘡墓は人と接触し難い、一般社会と離れた山奥・海岸・離島に存在する。

大村藩領の疱瘡墓の多くは内陸の山奥にある。大村市、西海市、波佐見町、時津町、長崎市で確認された疱瘡墓はいずれも山間部にある。そして、最も山深いところにある疱瘡墓が大村市の疱瘡墓である。同じ山間部でも比較的集落に近いところにつくられているのが波佐見の疱瘡墓である。

五島地方の場合、福江島の内閣を除けば、多くが海岸や離島にある。福江島の南河原や握りの浜、中通島の赤波江などは海岸であり、前島、頭ヶ島などは離島である。墓地は確認されていないが、その他にも離島を隔離地としている例は多い⁸。

また、五島では疱瘡墓の近くに潜伏キリシタンが大村領内から移住することが少なくない（本馬 2021）。大村藩領から五島への移住については、五島藩の『公譜別録拾遺』には、「寛政九年藩主盛運、大村の農民一〇八人を五島に移し、田地を開墾せしむ。五島は地広く人少なくして、山林の未だ開けざるもの多きを盛運公常に憂い給い、此度大村候に乞うて、其の民を此地に移し給ふ」と記されている。寛政9年（1797）の百姓移住協定は、堰を切ったように大村藩領から五島藩領への百姓の移住が活発に展開する画期となった（岩崎 2013）。移住した百姓の中には潜伏キリシタンが多く含まれていたとされる⁹。

調査の結果、潜伏キリシタンの移住地（図4）と疱瘡の隔離場所がよく重なっているこ

とが確認できた。例えば、福江島の疱瘡記念物「三界萬霊塔」が建てられた石塔鼻の近くには、南河原のキリシタン墓地がある。石組墓が並んでおり、それらは潜伏キリシタンの墓とされている。また、中通島赤波江の疱瘡墓は赤波江教会の共同墓地にあり、キリシタン墓と同じ敷地の中にある。それから、キリシタンが移り住んだとされる頭ヶ島も元々は疱瘡の隔離島であり、前島も潜伏キリシタンが住んだ島であった。本馬は疱瘡小屋があったところの近くに集落を営んだ理由として信仰を隠す意図があったと推測しているが（本馬 2021）、未開の地を選ぶことで先住者との摩擦を避けることも要因であったと考える。

天草の場合も五島の同様に山奥、海岸、離島にあったとみられるが、現在、疱瘡墓が確認されているのは山間部の貢山、ハウソ谷のみである。文献史料によれば、天草市の高浜の外平の海岸近くに疱瘡小屋があり、付近に病死者が埋葬されたことがわかる（中山 2022：35）。宝永6年（1709）には郡中疱瘡病人の手当て方を制定し、「疱瘡人の山小屋は田畑の邪魔にならない所を見立て、一人前二間四方の長小屋に拵え、屋根壁等は茅簾え入念に圍い置くこと、一村で20人までは全部山小屋にても医師にかけて十分養生させ、病人一人に二人づつの看護人を付き添わせ、病人の扶持米、医師への諸掛りの宰領人三人を置くこと。養生の費用が困難となれば申出るように」という文面が村々へ廻達された（橋村 2021：157）。また、天保9年（1838）10月に天草下島楠浦村で疱瘡が流行し、同村内の本渡水道に浮かぶ錦島（二色島）へ小屋掛けし、病人を隔離している。なお、その後、この島の病人小屋について、本渡水道をはさんだ対岸の天草上島の下浦村から楠浦村と本戸組大庄屋へ苦情が出され訴訟となっている（橋村 2021：158）。

橋村は、山への隔離が主流であった感染者への対応が19世紀前半になると、地付きの無人島への隔離が見られるようになったことを指摘している（橋村 2021：157）。確かにその傾向は認められる。地勢に応じて立地が選ばれただけでなく、年代的な特徴を示している可能性もある。

6.2 疱瘡墓の年代

大村藩と五島藩（富江領を含む）の疱瘡墓に刻まれた亡くなった年をまとめて10年ずつ集計して、二つのグラフ図を作った。大村藩の場合、18世紀後半に大村藩の犠牲者が多いが、疱瘡の有効的な予防法の種痘が普及した嘉永年間（1848-1854）より新しい疱瘡墓は確認されていない（図2）。一方、五島藩の場合、犠牲者の数は19世紀前半が多い（図3）。文政年間以前の五島藩の疱瘡墓は石組墓や石積墓のみと推定している。この犠牲者数の増

加は、後に述べる大村藩の外海からの移住に伴う人口増加も関わりがある。

没年月日が刻まれている墓石の中で、最も古いものは波佐見の白岳墓地の元禄2年(1689)の墓石である。前に述べたように、大村藩政日記の『九葉実録』には、元禄元年(1688)に波佐見村で疱瘡が流行した記録がみられる。そのため、白岳墓地はこの時の流行の際の疱瘡墓の可能性が高いと考えられる。

そして、大村領内で最も新しいものは黒岩墓地の弘化3年(1846)の墓石であり、疱瘡の有効的な予防法の種痘が普及した嘉永年間より新しい疱瘡墓はまだ発見されていない。種痘が普及して隔離施設の閉鎖の後に建てられたとみられる横瀬郷の「靈魂塚」の建立年代が嘉永5年(1852)であり、疱瘡墓の年代と矛盾しない。大村藩では嘉永2年(1849)から種痘が普及していくが、種痘の普及時期が地域によって異なると考える。

また、疱瘡墓の中には没年月日が刻まれている墓石以外、自然石で作られた疱瘡墓が大量に存在する。これらには没年が刻まれていないため、これらの正確な年代は不明である。墓石から判断できない場合は墓地で発見された陶磁器の年代から墓の利用年代が推定することができる。葉山墓地や元村墓地で採取された陶磁器から見ると、陶磁器の年代も18世紀より新しいものがほとんどなので、やはり疱瘡墓の利用年代は18世紀以後が中心であることがわかる。

墓石銘や採集陶磁器の調査結果から見ると、18世紀から19世紀にかけて、疱瘡で亡くなった犠牲者が多いことが分かる。特に18世紀の後半、犠牲者が多く見られる。

6.3 疱瘡墓の型式

疱瘡墓は地域によってさまざまな形態がある。柱の形をした墓石のものは一般の近世墓と変わらず、地域の違いも小さいが、自然石を用いた墓は地域によって異なる。

大村市と波佐見町の自然石の墓は一個の石を立てたものが多い。五島の自然石の墓はいくつかの石を組み合わせた長方形や円形の石組墓が多く、天草の自然石の墓は石囲い状の石積墓の中央に明らかな立碑がある墓が多く見られる。

また、大村市の疱瘡墓の特徴として、長方形と円形の墓穴を地表に見ることができる。長持ちやオケなどのものを利用して埋葬されたと思われるが、丁寧に埋葬されていないためか、地面が陥落している。短い期間にあまりに多くの人々が亡くなったからと考える。そのため、戒名を入れず、俗名のみ墓も多くある。これは他の疱瘡墓では見られない特徴である。

そして、大村市の疱瘡墓地の墓には犠牲者の住所が生活した場所の地名を刻んでいる。これも他の疱瘡墓ではあまり見られない。一つの地区だけでなく、いろいろな地区の人が埋められたためであろう。大村市の墓地は広い範囲の人々が埋葬されていることがわかる。他国養生に伴う島原半島の天草墓と共通している。

また、死因である「疱瘡」の文字が刻まれたものは五島の疱瘡墓でしか見られないし、「十字」の刻印があるものは大村市の墓地でのみ発見されている。

7 結論

以上の調査と分析の結果、大村、五島、天草地方の各地に点在する疱瘡墓などの石造物を通じて、これまで明らかにされていなかった疱瘡墓の具体的な分布状況や現況、その地域性や多様性を示すことができた。そして、いわゆる「無痘地」の疱瘡流行の実態について明らかにできた。以下、それらを整理して説明する。

7.1 疱瘡墓の地域性と多様性

前章でまとめたように、疱瘡墓の位置、環境、型式などは様々であり、地域性や多様性がみられる。それらをまとめたものが表1である。この地域性や多様性は疱瘡流行の地域性や歴史性が反映されたものと考えられる。

一方、同じ地域内であっても疱瘡について政策が地域によって異なる。例えば、元禄元年に大村藩領の波佐見村で疱瘡が流行した際、「送捨て」の制度が採られたわけではなく、在宅治療も認められた。その結果が疱瘡墓の分布に反映されている。『波佐見史 上巻』には、疱瘡にかかるとすぐにこの小屋に送られて介抱を受けたが、看護の不備と医術の幼稚不完全によって非命の死を遂げた者が多く、町内の各所の山中にその墓が点在しているとあるように(波佐見史編纂委員会 1976)、疱瘡墓は各郷に点在している(野上・賈 2022)。波佐見の疱瘡政策は「在宅療養」であったためであろう。一方、大村は城下町で、人口も多く、何より玖島城に近く、藩境に位置する波佐見とは異なっている。そのため、徹底した「山揚げ」政策が行われた。広い範囲の地域の人々が山に隔離されたため、墓石には多くの地名が入れられている。

このように疱瘡墓の形態は政策が反映されており、言い換えれば、疱瘡墓の地域性と多様性から疱瘡対策の違いを知ることができる。

7.2 「無痘地」における感染状況

無痘地における感染状況について考える。疱瘡墓の数と分布からみると、無痘地は決して疱瘡が流行しない土地ではなかったと考える。実際に疱瘡流行する時多くの人が感染して亡くなった。大村市内の疱瘡墓で確認されている疱瘡墓だけでもおそらく1000基以上の墓がある。「無痘地」政策は多くの犠牲の上に成り立っていたと考える。

そして、無痘地以外の日本の多くの場所では、疱瘡は子供の病気とされていた。大都市の子どもにとっては、疱瘡は通過儀礼的な病であったことは前に述べたが、飛騨の山村の明和8年(1771)から嘉永5年(1852)までの間の寺の過去帳の調査では、5歳未満の子供の死亡率が極端に高い結果が出ている(相川 2018:19)。また、長崎市には疱瘡病死者を供養する2つの疱瘡記念物があり、寛文2年(1662)と正徳2年(1712)に疱瘡が大流行し、それぞれ数千人の死者を出しているが、いずれも主として子どもが亡くなっている。そのため、無痘地以外の地域で疱瘡が流行した際には、多くの子どもが亡くなる傾向がある。

しかし、「無痘地」の疱瘡墓の墓石銘を見ると、多くは成人が感染して亡くなった墓であることがわかる。無痘地の大人は免疫を持っていないため多くの者が感染している。しかも子どもよりも死亡率が高かったためか、多くの者が亡くなっている。例えば、萱瀬の霊魂塚の碑文によれば、罹患者数195人に対し、64名が亡くなっている。死亡率33%である。東昇の研究によれば、天草で文化4年~5年(1807~1808)疱瘡が流行した時の子どもの死者の割合は25%にすぎない。多くの成人が亡くなっている(図5)。成人の犠牲は労働力を損失してしまい、社会的な危機が発生する可能性がある。無痘地の政策は、大きなリスクを持った政策とも言える。

無痘地は、ウイルスが入り込まない間は安定的な社会が続くが、一度、ウイルスが入ると、大きな危機に直面することとなる。18世紀後半以降の疱瘡墓の増加は、無痘地の政策の危うさを表している。19世紀の種痘の開発と普及は、無痘地にとってタイミングのよい大きな助け船となった。

8 おわりに

本論は江戸時代の疱瘡と疱瘡対策をテーマにしたものであるが、新型コロナウイルスなどの感染症が問題となっているように、現代にも通じるテーマである。あえて言うならば、無痘地の政策は、現在の「ゼロコロナ」政策とも重なって見える。ワクチンが政策の成否

を決める点も同様であるし、政策に限界があることも同じである。

疱瘡墓はそれ自体、隔離と差別を物語るものである。隔離は差別を生み出す。特に恐怖感の強い病気についてであればなおさらである。ウイルスと菌の違いはあるが、同じように隔離されて、差別されたまま死後も専用の墓地に埋葬された人々がハンセン病患者である。また、新型コロナウイルスの感染初期においてみられた感染者への多くの中傷や差別があり、それが家族へも向けられた。隔離に伴う差別も現代に通じるテーマである。

さらに疱瘡墓の周辺には、隔離の対象となっていた疱瘡患者だけでなく、迫害の対象となっていた潜伏キリシタンも移り住み、差別を受けていた原爆被爆者が埋葬されたところもある。疱瘡墓が存在する空間は疱瘡患者だけではなく、その他の差別と迫害の空間ともつながっている。

疱瘡墓の研究は、感染症対策、隔離が生み出す問題など、現代社会が抱える問題の解決の一助となるテーマと考える。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。芳名を記して、謝意としたい。

王維、賽漢卓娜、木村直樹、才津祐美子、関根達人、渡辺芳郎、石橋春奈、中野雄二、盛山隆行、関根達人、大野安生、柴田亮、田島陽子、平田賢明、中山圭、竹野市朗、永治克行、阿野さなえ、中尾篤志（敬称略、順不同）

引用・参考文献

- 相川忠臣 2018 「天然痘—地方病から地球規模の病気へ、そして根絶へ—」『天然痘との闘い 九州の種痘』 16-20頁
- 池田直温1861 『牛痘弁非』
- 磯田道史 2020 『感染症の日本史』文春新書
- 岩崎義則 2013 「五島灘・角力灘海域を舞台とした18～19世紀における潜伏キリシタンの移住について」『史淵』第150輯 九州大学大学院人文科学研究院 27-67頁
- 大島明秀 2018 「村井琴山「疱瘡問答」」『史料・九州の種痘：「九州地域の種痘伝播と地域医療の近代化に関する基礎的研究」報告書』 27-41頁
- 大村市医師会編集委員会 1994 『大村医史』
- 大村市史編さん委員会 2013 『新編大村市史 第五巻』
- 大村市史編さん委員会 2015 『新編大村市史 第3巻（近世編）』
- 大村史談会編 1994 『九葉実録第一冊』
- 大村史談会編 1995 『九葉実録第二冊』
- 大村藩之醫學出版會 1930 『大村藩の醫學』

- 賈文夢 2022 「肥前大村・五島の疱瘡関連石造物について」『長崎大学多文化社会研究 Vol.8』267-283頁
- 金子信二 2018 「佐賀の疱瘡神」『天然痘との闘い 九州の種痘』115頁
- 久田松和則 2022 「大村市雄ヶ原黒岩墓地の疱瘡墓」『感染症と考古学』発表要旨集 長崎大学多文化社会学部・長崎県考古学会 22-25頁
- 香西豊子 2019 『種痘という<衛生> 近世日本における予防接種の歴史』
- 五島市 2011 (更新)「疱瘡墓」<https://www.city.goto.nagasaki.jp/s014/010/040/160/200/020/20190322154444.html> (2024年1月4日確認)
- 西海町教育委員会 2005 『西海町郷土誌』
- 酒井シヅ 2002 『病が語る日本史』講談社学術文庫
- 堤正通 2007 「久賀島キリシタン史 五島崩れ(キリシタン迫害) 発端の島」『復活の島—五島・久賀島キリスト教墓碑調査報告書』28-33頁
- 司馬江漢 1986 『江漢西遊日記』東洋文倉
- 新魚目町教育委員会 1986 『新魚目町郷土誌』
- 添川正夫 1987 『日本痘苗序説』近代出版
- 立川昭二 1984 『病いと人間の文化史』新潮選書
- 多良見町教育委員会編 1995 『多良見町郷土誌』資・史料編
- 鶴田文史 1986 『天草の歴史文化探訪』天草文化出版社
- 富江町教育委員会 1980 『富江町郷土誌』
- 内藤莞爾 1979 『五島列島のキリスト教系家族—末子相続と隠居分家—』弘文社
- 長崎県有川町教育委員会 1996 『頭ヶ島白浜遺跡』
- 中島功 1973 『五島編年史』国書刊行会
- 中島陽一郎 1982 『病気日本史』雄山閣
- 中山圭 2022 「天草における疱瘡対策」『感染症と考古学』発表要旨集 長崎大学多文化社会学部・長崎県考古学会 34-39頁
- 長興専齋 1958 「舊大村藩種痘之話」『醫學古典集(2)』72-84頁
- 榎林宗建1849『牛痘小考』(富士川文庫)
- 二宮陸雄 1997 『種痘医北城諒齋天然痘に挑む』平河出版社
- 日本医史学会 1958 『医学古典集(2)松香私志』医歯薬出版株式会社 80-83頁
- 野上建紀・賈文夢・石橋春奈・田中正幸 2022 「長崎県時津町元村郷の「疱瘡墓」調査」『長崎大学多文化社会研究』Vol.8 301-315頁
- 野上建紀・賈文夢・石橋春奈 2022 「五島列島の疱瘡墓について」『長崎大学多文化社会研究』Vol.8 245-266頁
- 野上建紀・賈文夢 2021a 『中尾郷の近世近現代墓2020年度「波佐見町文化的景観」に関する基礎調査(中尾山墓地編)』長崎大学多文化社会学部
- 野上建紀・賈文夢 2021b 「波佐見中尾山の「疱瘡墓」について」『金沢大学考古学紀要』第42号 113-134頁
- 野上建紀・賈文夢 2022 「長崎県波佐見町の「疱瘡墓」の分布について」『金沢大学考古学紀要』第43号 23-36頁
- 波佐見史編纂委員会 1976 『波佐見史 上巻』
- 藤野保 1982 『大村郷村記』国書刊行会
- 橋村修 2021 「江戸時代における疫病の水際対策」秋道智彌・角南篤編『海とヒトの関係学4 疫病と海』西日本出版社 148-163頁
- 橋本伯寿 1811 『断毒論』
- 東昇 2009 「近世肥後国天草における疱瘡対策—山小屋と他国養生」『京都府立大学学術報告「人文」第六十一号』143-160頁
- 東昇 2021 「近世後期天草郡高浜村における疱瘡流行と迫・家への影響」『京都府立大学学術報告「人文」』第73号 129-152頁

- 平田賢明 2022 「野崎島・沖ノ神嶋神社の疱瘡退散祈祷」『「感染症と考古学」発表要旨集』長崎大学
多文化社会学部・長崎県考古学会 30-33頁
- 福江市史編集委員会 1995『福江市史（上巻）』
- 本馬貞夫 2021 『世界遺産 キリシタンの里—長崎・天草の信仰史をたずねる』九州大学出版会
- 本渡市教育委員会 1995 『天領天草大庄屋木山家文書 御用触写帳』一
- 松本教夫 1981 「高浜の疱瘡について」『西海辺記』二 天草民俗研究会 27-38頁
- 宮本常一 2015 『私の日本地図—五島列島』未来社
- 山内勇輝 2018 「大村藩の種痘」『天然痘との闘い 九州の種痘』98-114頁
- 山下貞文 2022 「天草人の魂の郷・加津佐・口之津・南有馬—天草墓と諸精霊追善供養塔から」『嶽
南風土記二十九号』45-58頁
- フロイス・ルイス 2000 『完訳フロイス日本史』9巻（松田毅一・川崎桃太訳）中央公論新社
- Crosby,A.W. 2003 Smallpox.In:Kiple,K.F.ed.The Cambridge Historical Dictionary of Disease,Cambridge
University Press pp.300-304

- ¹ 天然痘はウイルスによって引き起こされる感染症である。天然痘ウイルスはDNA ウイルスであり、ボックスウイルスの一種である。『ケンブリッジ疾病史事典（The Cambridge Historical Dictionary of Disease）』の中で、天然痘ウイルスはさまざまな株があると想定されるが、大きく二種類に分けられる（Kenneth2009）。重篤な症状を引き起こし致死率の高い「メジャー」と、症状が比較的軽く致死率も低い「マイナー」である（香西 2019：36）。
- ² 天然痘ウイルスは主に空気伝染で吸入により、咽頭と気道から体内に侵入する。12日程度の潜伏期があり、めまい、激しい頭痛を伴う高熱で始まる。発熱して3、4日後に発疹が顔や手足に現われ、口腔・咽頭と全身に広がり、6日後水泡となる。7日以降水疱から膿疱に進展し、紅斑を生じ高熱を発する。8、9日後に皮膚病変は乾き始め、続いて痂皮を生じて治癒に向かう。3週後落屑、治癒した後、あとが瘢痕となって顔にあばたを生じた。乳児の痘が口腔・咽頭・食道に波及すると、哺乳できなくなり、乳児死亡率は5割を超えた（相川 2018：16）。
- ³ 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00001942#?c=0&m=0&s=0&cv=6&r=0&xywh=-9644%2C-258%2C24903%2C4159>
- ⁴ 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2596358/1/20>
- ⁵ 碗が大半を占め、次いで瓶や香炉などがあり、皿も少量見られる。焼成不良のものや他の製品と熔着した失敗品も含まれている。また、用途は定かではないが、窯道具のハマもみられる（野上・買 2021b）。
- ⁶ 大村藩医長与俊達が、文政13年（1830）に藩命により痘家となり、建設した種痘の施術所、病舎の跡地である。1970年11月24日付けで大村市教育委員会より市指定史跡になっている。
- ⁷ 発掘調査者は、近世墓の被葬者については、現状では頭ヶ島島内の人ではなく島外の人々と考えている。その根拠としては、まず、現在の白浜地区の人々の墓が調査区の東側にあり、住民によって手厚い追善供養がなされているのに対し、調査区より出土した近世墓地は既に無縁化していること、さらに現在の白浜地区の人々が近世末に入植したキリスト教信者の末裔であるのに対し、調査した近世墓の副葬品などにはキリスト教的な要素が全くみられないどころか、数珠や六道銭など、むしろ仏教的な要素をもつこと、また、近世の頭ヶ島は無入島であったといわれることなどをあげている（長崎県有川町教育委員会 1996）。
- ⁸ 例えば、橋村は次の例を挙げている。福江島富江の太郎島（多郎島）では、文久4年（1864）に疱瘡が発生した際に小屋掛けし、「逃藪」（避難所）がつけられた。天保8年（1837）、中通島飯ノ瀬戸村では144人の死者が出たため、村の目の前の串島に隔離している（橋村 2021：152）。
- ⁹ 「異宗徒人口戸数并死生出奔調目録 福江藩」により、明治5年、福江藩は1500人に及ぶカトリック信者が、近世期から大村領からの居付百姓がいた各所に存在していたことを把握していることがわかる（岩崎 2013）。

表2 疱瘡墓の墓碑銘および没年月日(1)

墓地名	No.	墓碑銘	没年月日	西暦
白岳	1	恵光信士	元禄二巳己天三月初三日	1689
白岳	2	宗春信士靈	元禄六年癸酉天二月二十八日	1693
白岳	3	法月道圓信士	元禄十丁天十二月二十七日	1697
白岳	4	妙心靈位	元禄十一寅天十二月十四日	1698
白岳	5	保林妙散信女灵位	元禄二巳己天五月二十五日	1689
白岳	6	恵順信士	元禄二巳己天三月初三日	1689

墓地名	No.	墓碑銘	没年月日	西暦
折敷瀬	1	釋圓心信士	文化五辰天十二月廿三日	1808
折敷瀬	2	釋即成信士	天保十四年卯十二月七日	1843

墓地名	No.	墓碑銘	没年月日	西暦
元村	1	妙法宗?靈	延享二乙丑天十二月廿日	1745
元村	2	釈妙智童女		
元村	3	法順達院理貞信士		
元村	4	釋静安童		
元村	5	釋妙?信女	文化十酉天十一月十八日	1813
元村	6	釋智辨童女	安永七年?十二月十日	1778
元村	7	釋妙林信女	宝永三年十一月十七日	1706
元村	8	眞如釋教誓信士靈		
元村	9	釈教訂信士	安永八年亥天十月廿九日	1779
元村	10	釈智瑞信士		
元村	11	妙法妙栄信女	文化十酉天八月十八日	1813
元村	12	妙法妙壽信女		
元村	13	妙法妙仙信女	延享三丙寅天二月廿七日	1746
元村	14	靈譽験誓信士塔	享保十八癸丑歲四月朔日	1733
元村	15	釋妙可信女		
元村	16	歸眞釋寂心信士	享保十八年二月廿六日	1733
元村	17	妙法妙生信女	安永七戌天三月十?日	1778
元村	18	妙法妙善靈		
元村	19	釋妙慶信女靈		
元村	20	妙法妙園信女	寛政元酉天五月十六日	1789
元村	21	釋照念信士		
元村	22	釈教西信士		
元村	23	釋妙春信女		
元村	24	妙名釋教西信士	寛政十二年申九月四日	1800
元村	25	妙喜信女	寛政三亥歲正月二十一日	1791
元村	26	釋?西信士		
元村	27	釈道心信士		
元村	28	觀隨信士	安永七戌年四月廿六日	1778
元村	29	一如妙衍信女	享保十八癸丑三月十日	1733
元村	30	釋妙秋信女	明和六丑天十二月六日	1769
元村	31	法名釋妙永信女		
元村	32	釋浄休信士	天明四辰閏正月十七	1784
元村	33	妙法妙雲信女		
元村	34	釋教雲墓		
元村	35	釈妙蓮信女	宝曆三酉天六月八日	1753
元村	36	釈智雲童子	寛政五丑歲十二月五日	1793
元村	37	智正童子	明和	
元村	38	慈雲妙題信女	宝曆四甲戌天閏二月廿六日	1754
元村	39	釋妙心信女	安永八亥二月二日	1779
元村	40	釋浄元信士		
元村	41	釋妙芳灵	明和七寅四月十一日	1770
元村	42	釋妙可信女	享和四子年三月廿九日	1804
元村	43	釈浄雲信士	安永五申天五月廿六日	1776
元村	44	妙法岳幽信士	安永三年天四月廿七日	1774

表3 疱瘡墓の墓碑銘および没年月日(2)

元村	45	釈教扶童子	明和七寅二月四日	1770
元村	46	妙法随信女	安永八亥九月廿・十八日	1779
元村	46	真如釈妙閑信女	安永八亥年十年?日	1779
元村	47	妙法皈善信士	文化四年丁卯正月十日	1807
元村	48	妙法妙林信女	明和七寅五月十三日	1770
元村	49	釋了智信士	天保十二年丑正月三日	1841
元村	50	法名釋妙元信女	文化元子年十二月十二日	1804
元村	51	妙法妙林信女	享保十四年六月十五日	1729
元村	52	釋妙瑞信女	寶曆三酉六月廿八日	1753
元村	53	法名釈教贊信士	文化十酉天十二月九日	1813
元村	54	釋得…	…年二月…	
元村	55	釈妙西信女	寶曆四戌十月二日	1754
元村	56	釋妙登信女	文化十四年丑正月六日	1817
元村	57	釈休心信士	安永八亥二月十八日	1779
元村	58	妙法常清信士	明和七庚寅天四月十九日	1770
元村	59	…為墓	…永八亥天…	1779
元村	60	法妙存…	正…巳正月廿一…	1713?
元村	61	釋妙智灵	寛政元酉四月廿一日	1789
元村	62	妙法理圓信…	安永八己亥十月九日	1779
元村	63	釋智了信士	寶曆三酉天七月朔日	1753
元村	64	法名釋浄念信士	安永七戌天十月九日	1778
元村	65	晴量童子	寛政十三酉年正月廿二日	1801
元村	66	釋了圓信士	寶曆十一巳年十月十三日	1761
元村	67	妙法妙山信女	寛政六寅十二月十八日	1794
元村	68	…雲信女靈		

墓地名	NO.	墓碑銘	没年月日	西暦
横山頭	1	本町三丁目俗名しん		
横山頭	2	妙法道詮信士	安永二癸巳九月?日	1773
横山頭	3	もりぞの□□文次良	享和二戌二月六日	1802
横山頭	4	妙法恵山日廣法師	安永六丁酉年八月二十一日	1777

墓地名	NO.	墓碑銘	没年月日	西暦
孫十	1	□□惣吉		
孫十	2	かやぜ村中ご?□□儀兵衛墓	安永六丁酉十一月廿八日	1777
孫十	3	かやぜ村?げ林平墓		

墓地名	NO.	墓碑銘	没年月日	西暦
餅ノ塔	1	??村七良		

墓地名	NO.	墓碑銘	没年月日	西暦
大浜	1	妙法能持院宗是日継居士	元文二巳年三月二十八日	1737
大浜	2	光闡院釋道教幽啓位靈	安永七戌戌天四月廿三日	1778

墓地名	NO.	墓碑銘	没年月日	西暦
南河原	1	南無阿彌陀佛白譽雲哲信士		
南河原	2	榮林信女	天保三壬寅三月…	1832
南河原	3	譽…女	文政…	
南河原	4	敬譽光生信女	文政七申二月廿三日	1824
南河原	5	闡譽自性信士	文政七申二月廿三日	1824
南河原	6	祥雲妙悦信女	文政七申二月廿八日	1824

墓地名	NO.	墓碑銘	没年月日	西暦
前島	1	尼妙道信女位	天保十三寅壬年八月十日	1842
前島	2	疱瘡而??死		

表4 疱瘡墓の墓碑銘および没年月日(3)

墓地名	NO.	墓碑銘	没年月日	西暦
握りの浜	1	釋妙光信女 キサ	明治三年午正月七日	1870
握りの浜	2	寒月… ?山名平	元治元年十一月十九日	1864
握りの浜	3	釈妙現信女	文久二戌十一月廿一日	1862
握りの浜	4	清山道孝信士	文久三子三月十九日	1863
握りの浜	5	妙林信女	元治二丑三月五日	1865
握りの浜	6	釈妙善信女	元治?年十一月七日	
握りの浜	7	釈道仙信? 三治	戌三月十七日	
握りの浜	8	含草院貞香妙清大姉	天保十三壬寅歲七月七日	1842
握りの浜	9		四月廿八日	
握りの浜	10	南無阿弥陀佛		

墓地名	NO.	墓碑銘	没年月日	西暦
赤波江	1	慈心院廣眷妙延大姉	天保十三寅年十一月?一日	1842
赤波江	2	白石鏡圓大姉		
赤波江	3	華光院釋…	天保?年四月十?日	
赤波江	4	清連院釈?如?誓大姉	天保十三年寅十月十二日	1842
赤波江	5	寛岳妙?信女	文久三亥天四月五日	1863
赤波江	6	歸真釈妙證信女位	天保十三寅十一月十一日	1842
赤波江	7	釈??妙善大姉	天保十三寅年十一月三日	1842
赤波江	9	?真嶺??信女位	文久二戌天八月十二日	1862
赤波江	12	似首村…	…四月九日	
赤波江	13		天保十二丑年一月十六日	1841
赤波江	13		同年同月九日	1841
赤波江	14	釋智清圓光信士	天保十三寅年十一月三日	1842

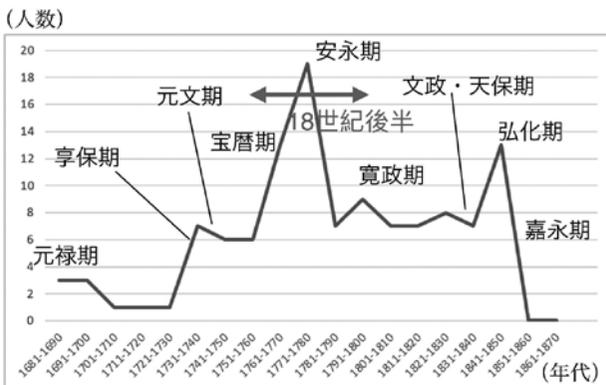


図2 大村地方疱瘡墓被葬者数の推移

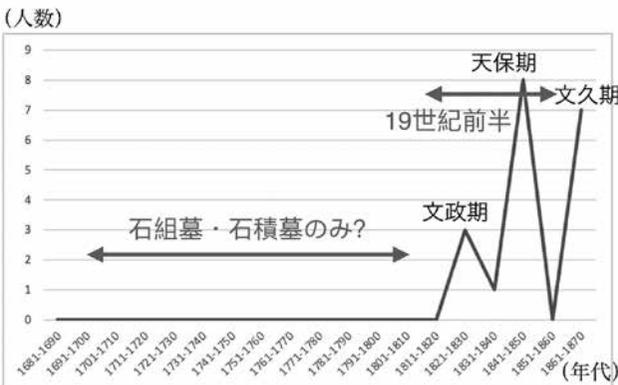


図3 五島地方疱瘡墓被葬者数の推移

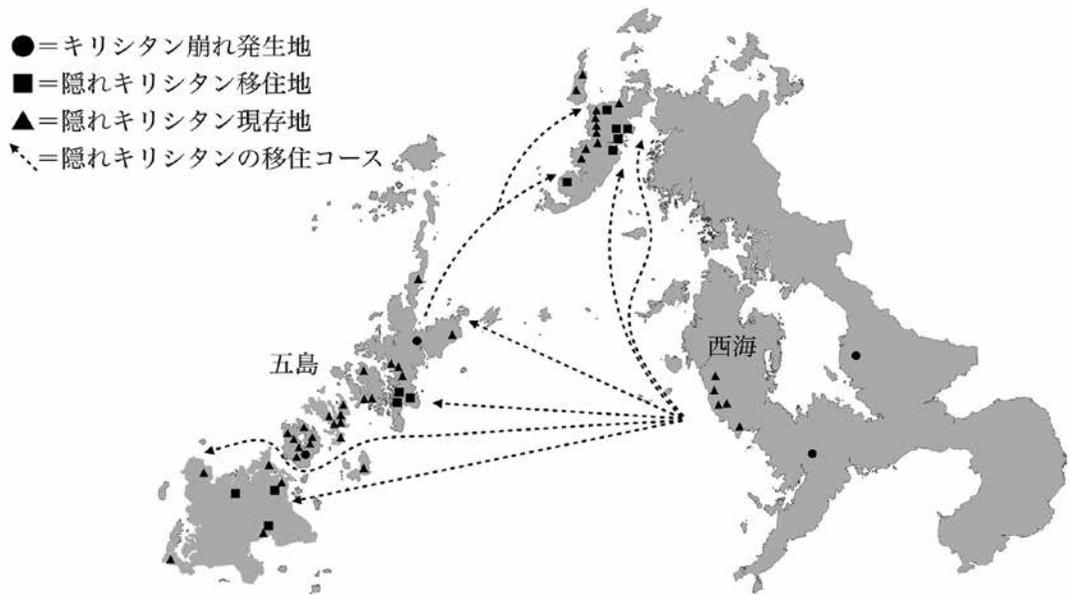


図4 潜伏キリシタン移住図 (鶴田 1983 : 198)

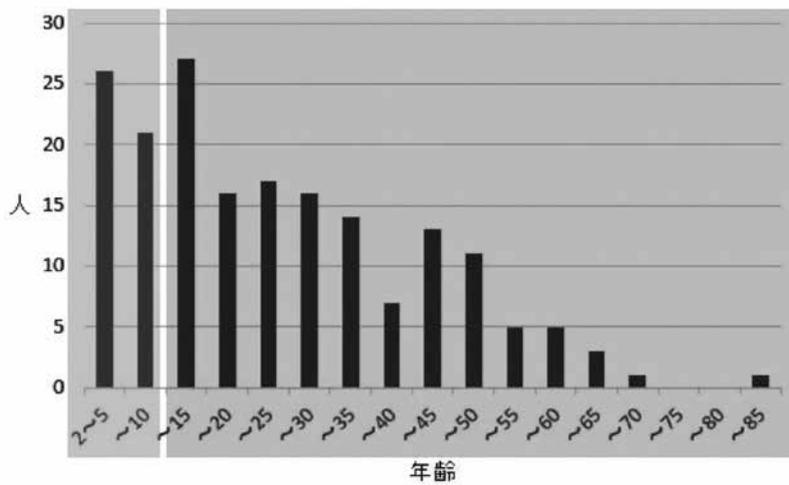


図5 天草地方の文化4・5年疱瘡流行の年齢別病人数 (東 2021)

